

第28回「ことば」フォーラム

外来語の過去・現在・未来

2005年11月5日(土)

名古屋国際センター・別棟ホール

杉戸 清樹 (国立国語研究所)

清水 義範 (作家)

水谷 修 (名古屋外国語大学)

後援:名古屋国際センター・中日新聞社

NHK名古屋放送局

独立行政法人 国立国語研究所

## ● あいさつ・趣旨説明

**司会（柏野 和佳子）** 前方の席が空いております。どうぞ前のほうにおいでください。

開演に先立ちまして、前方の画面について御説明申し上げます。皆さまの向かって右側には、外来語についてのあれこれの話題についてお示ししていますので、開演前までに御覧になってください。皆さまの左側の画面は、実際に講演が始まりましたら、講演者の話している声をインターネット回線で同時字幕を作る会社へ送り出して、そちらのほうでコンピューターが変換をし、こちらで表示いたします。まだ完全ではございませんので、ところどころ、誤変換・誤認識がございますが、その点はどうか、あしからず御了承ください。では1時半に始めたいと思いますのでもうしばらく右側の画面を御覧になってお待ちください。

皆さま、大変お待たせいたしました。定刻となりましたので、ただいまより、第28回「ことば」フォーラム「外来語の過去・現在・未来」と題しましてフォーラムを開催いたします。本日は多数御参加くださいますとありがとうございます。これから約2時間半にわたりまして、皆さまとともに外来語について考えてまいりたいと思います。私、本日の司会を務めます、国立国語研究所研究開発部門の柏野和佳子と申します。どうぞよろしくお願いいたします。まず初めに、国立国語研究所所長の杉戸清樹より皆さまに御挨拶を申し上げます。

**杉戸** 皆さん、こんにちは。国立国語研究所の杉戸と申します。今日は大勢の方にお集まりいただきまして、ありがとうございます。さて、国立国語研究所は、国民の皆さまの言葉の暮らしを調査したり、研究したりする、そういう研究所として、できました。お手元にこういう資料（研究所概要）を準備いたしましたけれども、そこで御覧いただけますけれども、すでに57年になります、いろいろな調査研究を進めてきているところでございます。その仕事のひとつといたしまして、最近5年ほど前から、この「ことば」フォーラム、「フォーラム」と外来語を使っているのですけれども、「広場」という意味で、いろいろな方が集まって、言葉について考える、あるいは意見を交わす、そういう広場という意味で「ことば」フォーラムと使っているわけですが、その催しを5年ほど前から続けてきております。今回で28回目になります。1年に5回ほど、東京だけでなく日本各地におじゃまして、開かせていただいております。言葉の専門家だけでなく、一般の皆さんに御参加いただき、その時々、国語についてのいろいろな話題を、話し合っていたり、研究の成果を御紹介したり、そういう機会にしたいと、目指しています。今回のテーマは、「外来語」を取り上げました。これまで日本になかった新しいものごとや考え方を、言葉とともに取り入れる、そのために、私どもの国語には、

最近では英語が多いのですけれども、いろいろな外国語から新しい言葉が入ってきて、国語の中に「外来語」として定着しています。このことは何も最近始まったことではなくて、奈良時代以前から古くはサンスクリット語が、インドの仏教が伝わると同時にその言葉も入りました、中国語、あるいはオランダ語、ポルトガル語、ドイツ語いろいろな言葉から、すでにこちら（会場右）の画面で御覧いただいておりますけれども、たくさんの方の外来語が日本語に根付き、そして私たちの言葉を一方では豊かにしてくれていると思います。戦後60年経ちますが、今、外来語は、後ほど話題に出ますが、増えている、そういう実態がございます。日頃、言葉について、テレビとか新聞で話題になるときに、よく取り上げられる話題の一つが「外来語」です。そこで、今回は「ことば」フォーラムのテーマとして、「外来語」を取り上げます。企画の内容は、後ほど司会者から御説明いたしますけれども、御参加の皆さんが「国語」とりわけ「外来語」につきまして改めてお考えいただく、そんなきっかけにいただければ幸いです。本日のこの会には、名古屋出身、西区の御出身とうかがっておりますが、皆さんにはすでにおなじみの作家、清水義範さん、もうお一方、名古屋外国語大学の学長、そしてかつて私どもの国語研究所の所長もお務めになりました水谷修さん、この水谷さんも名古屋の中川区の御出身でございます。このお二方にお話をお願いしております。清水さん、水谷さん今日はどうもありがとうございます。のちほど私もお話をいたしますが、ついながら、実は私は名古屋の中村区の出身でございます。つまり、今日の話し手は3人とも名古屋の出身です。意図してそろえたというわけではないのですが、そういうことになりました。どうぞよろしくお願いたします。また開催するにつきましては、上の看板にもありますように、会場でお世話になっている名古屋国際センター、そして報道機関としてNHK名古屋放送局、中日新聞社から御後援をいただいております。会場のこと、あるいは事前の案内などでたくさんの助けをいただいて開催することができております。この場をお借りして、御礼申し上げます。ともあれ4時までの短い時間ではありますけれども、いつも私はこういう挨拶をするときに自分の声が固いなと思って恐縮するのですが、どうぞ緊張せずにゆったりとした気分で、言葉について思いをめぐらす時間にしていただければと願っております。どうぞよろしくお願いたします。ありがとうございました。

**司会** ありがとうございます。それではここでお手元の封筒の中について確認させてください。皆さまにお配りいたしました封筒の中には、本日の講演内容が書いてあります。こちらの綴じてある冊子、それから、講演ごとに質問時間を設けてはおりませんが、講演者に質問を出したいという方は、この同封の小さな質問用紙に御記入ください。休憩のときに回収いたします。この小さな質問票と、お帰りの際にぜひ御協力をお願いした

い、こちらのピンクのアンケート用紙、そして、国語研究所の概要と広報紙が入っています。もし万が一、お手元の封筒に入っていないものがございましたら、周りに立っております係員までお声をかけてください。さて、本日のフォーラムの趣旨について御説明申し上げます。今回のフォーラムのテーマは「外来語の過去・現在・未来」です。最近難しい外来語が新聞や広報紙に使われておりまして、意味がよく分からない、といった声がよく聞かれます。先ほど、会が始まる前に皆さまの右手の画面にいくつか外来語を示しました。「アカウントビリティ」「メンタルヘルス」「コンプライアンス」など、何となく見聞きしておりますが、実は意味がよく分からない、といったものが増えていくように感じられます。しかしその一方で、例えば「コップ」「パン」「カレンダー」「テレビ」など、私たちが生活していく上で欠くことのできない外来語も数多くございます。先ほど、スライドにいくつかの外来語については、もともとどここの国の言葉であったかを示しましたが、「はあ、そうなんだ。もともとこんな国の言葉なんだ」ということを改めてお感じになったのではないのでしょうか。私たちの生活になじんでしまっているものも少なくありません。いろいろなタイプの外来語が現在、存在しております。そこで、そもそも外来語とはどんなものであるのか、そして、それらは日本語の中でどういう役割をもっているのか、今回のフォーラムでは、「外来語の過去・現在・未来」という視点から、外来語がもっている長所や短所、日本語の中に定着する仕組み、将来像などについて、皆さんと一緒に考えてまいりたいと存じます。本日の流れについて御説明いたします。お手元のプログラムを御覧ください。初めに、所長の杉戸清樹より「暮らしの中の外来語ーその<光>と<陰>ー」と題してお話しいたします。続きまして作家の清水義範さんより、「小説の中の外来語」と題してお話ししていただきます。さらに名古屋外国語大学の水谷修さんより、「外来語をとりかこむものー外来人、外来もの、外来文化を考えるー」と題して、お話しいただきます。そしてその後に、20分間休憩をはさみます。皆さまからの質問はそのときに集めますので、質問のある方は、どうぞ質問票に御記入ください。そして最後に「外来語の未来」と題しまして、全体討議の時間を設けます。先ほどお願い申し上げましたが、最後にはそのピンクのアンケート用紙にぜひ御感想などを御記入くださいまして、お帰りください。以上のような流れを予定しております。よろしくお話しいたします。それでは講演に移ります。初めに国立国語研究所所長の杉戸清樹さんに「暮らしの中の外来語ーその<光>と<陰>ー」と題し、お話ししていただきます。杉戸さんは国語研究所にて、「言語行動」をテーマに研究を進めております。国語研究所外来語委員会の委員長を務めるほか、文化審議会委員、日本語教育学会会長なども務めていらっしゃいます。数年前になります、清水義範さんとともに、NHKの「ことばてれび」講座に出演されていたこともございます。テレビで御覧

になっていた方もいらっしゃるのではないのでしょうか。それではお願いいたします。

## ● 「暮らしの中の外来語ーその<光>と<陰>ー」 杉戸 清樹

(配布資料 : p. 1 ~ 5)

杉戸 あらためて、よろしくお願ひいたします。杉戸清樹と申します。私は、お手元の資料の2ページからでございます。「暮らしの中の外来語ーその<光>と<陰>ー」と題しまして、「<光>と<陰>」，もって回った<sup>ゆ</sup>比喩的な言葉遣いですが<光>と申しますのは、暮らしに役立つ、あるいは言葉を豊かにする、先ほど司会者は「長所・短所」と申しましたが、その「長所」のほうの意味を込めております。<陰>のほうですが、外来語にも、いいところばかりではなくて、ちょっと困った面もある、言葉の伝え合い、コミュニケーション、それを邪魔する、そういう側面もある。そういうふう<sup>に</sup>に二つの側面があるということ<sup>を</sup>を気にしながら、注意しながら、お話をしてまいりたいと思います。そして、<光>を、長所ですから、伸ばす、<光>を広げる、その工夫は何があるか。それから<陰>、困ったところですから、その<陰>を減らしたい、その減らす工夫として何があるか、そういうことを、一つは御紹介も兼ねて、皆さんと一緒に考える機会を過ごせたらと、そう願っております。初めに、そもそも「外来語」とは、というところで、学校の国語の授業の復習のようになってしまいますが、1.(資料 p. 2)のところを御覧いただきます。これは日本語の単語を、そのそれぞれの言葉の由来ですね、どういうところからきたのかということ、その由来から見たときの分類の一つです。専門語としては「語種」、語の種類、「語種」という言葉を使いますが、4種類あります。「和語・漢語・外来語・混種語」。「和語」というのは、もともとの日本語です。「大和言葉」と言われたりします。それから「漢語」、これは古い中国の言葉から入ってきた言葉です。それから「外来語」、二つ目の漢語も外来語の一つではありますが、今の段階では、中国から入ってきた漢語は非常にたくさんありますので別にしまして、「中国語以外の外来語から日本に入ってきた言葉」、これを外来語というのが一般的であります。そして「混種語」、「和語と漢語がつながった言葉」、あるいは「外来語と和語がつながった言葉」があります、そういったものも一つ分類といたします。以上4種類あります。そのうちの一つが「外来語」です。例として、ここに「いえ(家)」という言葉から広がる和語、漢語、外来語の例をいくつか並べておきました(資料 p. 2)。それぞれ同じような意味、基本的には同じ意味を表す部分をもちながら、しかし、一つ一つを比べていただくと、どこか違っている。違う意味を表す言葉として、和語、漢語、外来語が並んでいる。そういった関係が、日本語の中の、語種<sup>の</sup>関係として一般的に見られます。先

ほど挨拶の中で申しました、古くは仏教の言葉としてのサンスクリット語が日本語に中国を經由して入ってきた、そういったことから始まって、平安時代には特に漢語、あるいは室町時代にはポルトガル語、あるいは幕末から明治にかけてはオランダ語とかドイツ語・フランス語、それから戦後から現代にかけては特に英語、そういったいろいろな言語が外来語の源として、日本語を、一方では豊かにし、一方では困った側面をもたせていると、そういったことだと思います。さて、2.ですが、その外来語、今日のテーマ、「外来語の過去・現在・未来」ですが、現在のところを、ちょっと御紹介したいと思います。私どもの研究所で進めているいろいろな調査研究の中から御紹介いたします。「外来語は、本当に増えているのか」という問いに答える調査結果でございます。

(1)として、一般の皆さんは外来語がどんなことになっていると感じていらっしゃるのか、これは言葉そのものというより皆さんの言葉についての意識ですね。これを『外来語に関する意識調査』というのをした結果から御紹介いたします。よく聞く意見としまして、一番多いと思われるのが「最近、新しい外来語が増えて、分からなくて困る」。こういう意見をしばしば耳にいたします。研究所にも、電話などでそういう御意見をいただきます。そのことを、質問してみました。全国で4500人くらいの方に質問をしたわけです。「ひごろ、読んだり聞いたりしている言葉の中で、外来語や略語の意味が分からなくて困ったことがありますか？」という質問をしました。そこに書いてある通りです。その答え、「しばしばある」24.4%。約4分の1です。「しばしば」というほどではないが「時々ある」、これが一番多くて約半数、53.3%。足すと78%、約8割の方が、最近新しい外来語が増えて困る、そういう意識・気持ちをもっていらっしゃいます。さて、それで、そこから私どもの研究所では、「本当にそうなのか」と、確かめる仕事をしようと考えました。(2)でございますが実際に使われる外来語の割合はどれくらいのものであろう。そういう調査をしております。まずは、1956年、昭和31年です。本屋さん・図書館に並んでいる月刊誌・週刊誌を90種類選びまして、その中に出てくる単語を、その当時はコンピューターはございませんが、一つ一つカードに書き写して数を数えるという仕事をしました。それが①の「雑誌90種の用字用語調査」です。ここでは、44万語を数えたわけです。次に②の「200万字(雑誌70種)調査」、①から約38年たちまして、平成6年、今度は70種類、同じように本屋さん・図書館に並んでいる雑誌ですが、70種類を選びまして、全部で74万語を数えたわけです。今度はコンピューターも使いまして調べました。その2回の調査を比べてみますと、38年間の、言葉の種類の変化が分かるという、そういう仕組みです。この(画面の)グラフを御覧ください。3ページに同じものが載っています。横になっている上の柱が新しいもの、最近の調査です。下が40年前の調査です。それで一番右のほうに黄色で、上が10.7%、

下が2.9%となっております。それが外来語の割合です。これは言葉の使われ方全体「のべ語数」と言いますが、そちらでの比較であります。下のほうでは約3%だったものが上では10%になっている、3倍以上ですね。それくらいの増え方をこの40年近くの間に行っているということが分かります。資料のほうには、もう一つ、言葉の種類の数、「異なり語数」でのグラフもあります。こちらのほうも全体として3倍くらいの伸びを示しています。つまり一番下、3ページが一番下に書きましたように、一言で言えば、約40年の間に、外来語が増えているというのが確かである。特に書き言葉のほうでは外来語が増えているのも確かである。語数、言葉全体としても、あるいは単語の種類としても、約3倍の増え方をしている、そういうことであります。二つの調査を御紹介しました。一つは私どもも含めて、国語を使っている一般の人たちが、外来語が増えて困っている、これも確かである。そして、実際に雑誌の書き言葉で使われている外来語は、言葉の種類としても、あるいは言葉全体としても、この40年間増えている。そういうことも確からしい。そういうことが分かってきております。これをふまえて、このあと、お二方の話や後の御質問などしていただければありがたいと思っています。4ページに進んでいただきまして、ここから先、私の表題の、〈光〉と〈陰〉というところに話を進めてまいります。最初に、〈光〉というのはよい面、つまり暮らしに役立つ、あるいは言葉の暮らしを豊かにしてくれる、そういう力を外来語はもっているということを申しました。それから逆に、ちょっと困った面もある。伝え合いを邪魔することもある、〈陰〉の部分もあるということを申しました。それを別な言い方をして、詳しく言い直してまとめたものが、4ページの上半分であります。上部に〈光〉の面、中ほどに〈陰〉の面を並べました。〈光〉の面、二つ項目を立てました。これまで日本になかったいろいろな新しいものごとや考え方、これを表現する言葉として、外来語が入ってきます。このことで、暮らしそのもの、あるいはそれが入ってきたこと、それを表すための言葉が豊かに充実すると、そういう可能性が広がる。それは認めていいことだと思います。そしてもう一つ、細かな意味合いの違い、ニュアンスと言いますね。細かな言葉の意味の違いを表現し分けるために、役立つ。先ほど、最初に「いえ（家）」とか「うち」とか「ハウス」とかそういう例を示しました。その一つ一つを比べてみると、基本的には同じ意味でも少しずつ意味が違う。言葉がたくさん多様性をもっているおかげで、使い分ける可能性が出てくる。そういったことを考えます。「外来語に関する意識調査」でも、たくさん選択肢を出して、外来語のよい点としてどんな点を感じていらっしゃいますか、と質問をしました。たくさん〇印が付いた項目を四つだけ、上位の四つだけを並べておきました。

- ・話が通じやすく便利である

- ・新しさを感じさせることができる。
- ・これまでに無かった物事や考え方を表せる
- ・しゃれた感じを表すことができる（資料 p. 4 調査結果より）

そういったよい面が意識されているというわけです。そして一方、<陰>の面と申しました。これはいろいろな言い方ができると思いますが、二つ並べました。耳慣れない新しい外来語、あるいは意味の分からない外来語、あるいは一部の専門家だけが使い合う専門的な外来語など、理解を超えたものは、場合によって、言葉の伝え合いを妨げる恐れを、いつも、いつもというところが大切なんです、いつもそれをもっているように思います。とりわけ、いろいろな立場の多くの人が読んだり聞いたりする、たくさんの方が読むという公共性の強い文章や放送などで、よく理解されていない外来語を不用意に使ってしまう。これは残念ながらよくあると言わざるを得ません。そうすると、伝えるべき内容が、伝えるべき相手にきちんと伝わらない。相手にきちんと伝わらない恐れ、これがあると思います。<陰>の面ですね。これは、やはり意識調査でもそこに示したように、「相手によって話が通じなくなる」、私は、「相手によって」という、選択肢のこの部分ですね、この部分をとりわけ注意しないといけないと思います。この部分を指摘した人は約半数、46.7%にのぼっています。以下御覧の通り、<陰>の面はやはり意識されている、ということです。そういう意識がだんだん捉えられてきています。ここからはちょっと急ぎ足なんです、<光>と<陰>について最初に申しましたように、それでは<光>の面を広げる工夫は何か。逆に、<陰>の面を狭める、そういう工夫はないだろうか。そういったところで二つお話を申し上げたいと思います。4ページの下の方、4.の項目を御覧いただきまして、まず<陰>を減らす努力の一つを御紹介します。これは身内の仕事であります、国語研究所が3年ほど前から続けてきて、新聞・テレビで報道もされておりますので、ご存じの方は見てくださっていると思いますが、非常に短く言えば、「外来語の言い換え提案」というものをしております。詳しくは先ほどのこのパンフレット（概要）の7ページを、後ほど御覧いただければ幸いです、7ページにその提案が紹介してございます。それから先ほどお待ちいただく時間に、こちら側のスライドでいくつか実例を示しました。もうすでに例が出ておりますけれども、それから休憩時間などに、ロビーでポスターを出しまして、詳しく御説明の担当者も付けておりますので、後ほど御覧ください。そういった仕事ですが、「外来語言い換え提案」というものがございます。「外来語言い換え提案」については、「検討の対象」をまずは絞り込んでいきます。国の省庁、文部科学省や外務省、その他の省庁がございましてね。そこから白書というものが毎年出されます。それから地方自治体、名古屋市、あるいは中村区とか西区とか区役所、そういったところが住民向けに広報紙というパンフレットを出



しています。これは、基本的に、いつでも専門家向けのものではありません。行政の専門家ではない、一般の人たちに分かってもらわなければいけない情報を伝える、そういう印刷物です。そういったものに分からない言葉が出ていたのでは困ります。そこを何とか、その<陰>を減らす工夫はないだろうか、そういう仕事です。「扱う単語」は、4ページ一番下、白書とか広報紙に使われるカタカナ言葉、外来語のうち、一般的人にまだ十分に理解されていないという、また別の調査をしまして、どうも皆さんよく分かっていないようだ、そういうふうに見えてきた言葉を、今のところまだ176語なのですが、選びまして、このような中身の提案をしています。5ページへいっていただいて、「提案の趣旨」についてです。その分かりにくい外来語を分かりやすくするための言葉の工夫、和語・漢語、つまり外来語ではない他の言葉の種類を選んで、それを言い換えの候補にして、提案する。その言い換えの提案を中心に、それだけではなくて補助的な説明、あるいは注記、これを添える工夫なども提案しております。先ほど出ておりましたが、一つの例ですが、医療や介護の世界で「インフォームド・コンセント」というのが、この20年近く前でしょうか、よく見たり聞いたりする言葉として出ております。これはやはり調査をしてみますと、「分からない」という方が多かったです。そういう言葉なわけですが、それに対して言い換え語といたしまして「納得診療」という言葉を提案しました。それから、「説明と同意」、医療のほうで実際に、すでに使われていた言葉ですが、これも添えました。この「納得診療」という言葉は、その後実際に病院の待合室のポスターに早速使ってもらったりしております。ありがたいことです。そういった活動をしております。こういう提案をしておりますが、その提案がその後、皆さんにどう受け入れていただいているかということも調査をしております。5ページの中ほど、一般の国民の反応・評価を載せてあります。「あなたは『言い換え語』と、もとの外来語ではどちらが分かりやすいと思いますか？」と、そういう質問をいたしましたところ、この三つの例については、こんな結果が出ております（資料p.5）。上の二つは、言い換えの提案をした漢語、二つとも漢語が並んでおります（インフォームド・コンセント→「納得診療」・グローバル→「地球規模」）が、そちらのほうの方が分かりやすい、と受け止めてくださっております。一番下、「デイ・サービス」については、「日帰り介護」という言葉を提案したんですが、これは「デイ・サービス」のほう、外来語のほうに少し支持されている。これは、言い訳がましく言うつもりはないのですが、もともとこの「デイ・サービス」はすでに一般の皆さんの間に定着していた言葉であったようでありまして、ということがありまして、これもあくまで一つの提案、一つの工夫、としてやっていることですが、こういう努力、少なくとも、例えば、白書を作る行政の専門家、あるいは広報誌を作る市役所、区役所のようなところの専門家の人たちは、一

度は立ち止まってこういう工夫をすることが、必要ではないだろうか。そういうことを考えていただくきっかけになれば、と書いているところでもあります。最後、まとめといたしまして、もう一つの側面、<光>の側面を広げる。むしろこちらのほうに力を注ぎたいというわけです。一つ目には、繰り返し申しましたように、外来語というのは、奈良時代以前から日本語にとってずっと続いてきたことであるということで、現在の日本語が育ち、そして我々の言葉、今の言葉の暮らしを支えてくれている、豊かに支えてくれている言葉の種類だと、そう思います。つまり、先人たちの、先輩たちのそうした工夫や努力、それを受け継いで、そして将来の日本語につなげたいと思います。心構えとしましてはそうではありますが、では、どうしたらいいのかと、具体的にになりますといろいろなことが考えられます。ここでは三つ並べました。一つ目。抽象的なのですが、時には、一歩立ち止まって言葉について問うてみる。こういう姿勢を普段もちたい、そんなふうに思います。そのとき、本当に伝わっているのだろうか、この相手にこの言葉で、あるいはこういう外来語で、本当に伝わっているのだろうか。ほかにもっと適切で、あるいはぴったりとした、そういった言い方はないだろうか、絶えず立ち止まりながら言葉を選ぶということ。これは、言うとき長いのですが、一瞬一瞬のパッパッとした気配りだろうと思います。これをぜひ将来に向けて続けたいものだと思います。二つ目が、そのために、自分の言葉の幅、選択肢をたくさん持つこと、まずは自分の言葉の幅を見つめ直して、たくさん持つ。そして広げる。そういう工夫というか努力というか、それをしたものだと思います。そのときに、資料に書きましたように、「同じ意味を表す別の言葉は無い、（言葉の形が違う以上）どこか（で意味）が違うはずだ」と。これは言語学の大原則でありまして、「類義語」とか「同義語」とか言いますが、原理的にはそれはありえない、言葉の形が違えば意味がどこかで違うはずだと、言語研究の世界ではそういう原則で考えています。そのことを毎日の暮らしの中で思い出したい、とそんなふうに思います。よく似た言葉だからこそ違いはあるはずだ。そういう気持ちで自分の言葉の幅、言葉の選択肢を見つめ直す。これは、実例は最初に戻っていただいて、「いえ」と「うち」はどう違うのか？ 「ハウス」と「ホーム」はどう違うのか？ 「我が家」と「ホーム」、「マイホーム」はどう違うのか？ それを考えることから始められるだろうと思います。それを一言で言えば、最後に書きました、「『言葉探し』を続けること」。そういうふうにとまとめたいと思います。自分のもっている言葉の幅を確かめ直すこと、これも「言葉探し」だと思います。それから、自分のまだ知らない、よく知らない、よく分からない言葉、それに出くわしたら、辞書なり何なりを探すこと、そして自分の言葉を広げること、そういう努力と言いますか、これは本当に毎日の暮らしの中のちょっとした工夫だと思います。これを続けたいものだと思います。最後に、

じゃあ具体的にどうすればいいの。心構えばかり言っていてもらちがあかないというところに答えまして、「類語辞典」のお話をしたいと思います。これは「国語辞典」と少し違った辞典で、ここ2、3年の間にたくさん出ております。これを一度見ていただければ分かると思います。それから国語研究所でも40年ほど前に、『分類語彙表』というものを出版しています。例えば、そこに実例が載っております。その中には、「努める」とか、「努力する」などという意味の言葉の選択肢・幅がずらっと並んでおります。その中によく見ていただきますと、「ハッスルする」とか「ベストを尽くす」という、外来語を交えた言葉も載っております。この言葉の広がりの中で、「努める」とか「努力する」とか、その言葉選びをしたい。そんなふうを考える次第であります。以上、最後は口早で、三つの提案を、〈光〉を広げるというところで、申しました。このことは最後の討論、あるいは皆さま方からの質問にも加えていただければと思っております。私のお話はここまでとさせていただきます。ありがとうございました。

**司会** ありがとうございました。最後のお話に出ました、「分類語彙表」などはロビーに展示してございますので、御興味をもたれた方は御覧になってください。それでは続きまして、作家の清水義範さんより「小説の中の外来語」と題しまして、お話しいただきます。清水さんは小説家で、「パスティーシュ」という新しい分野を確立なされました。「パスティーシュ」とは「文体模写」のことを言います。もともとフランス語です。1988年、『国語入試問題必勝法』により、第9回吉川英治文学新人賞を受賞され、その後も多くの作品を発表され続けています。名古屋を題材にした作品も数多くあり、皆さんもよくご存じのことかと思えます。最近では、作文教室を主催されるなど、さまざまなジャンルで御活躍されております。それでは、清水さんよろしく願いいたします。

### ●「小説の中の外来語」清水 義範 (配布資料：p. 6～17)

**清水** 清水です、どうぞよろしく願いいたします。外来語というテーマにつきまして、私も一応小説家なものですから、小説のほうでは外来語はどんなふうに使われてきたのだらうかというのを、古くさかのぼって、最近の傾向まで少し考えてみようかなと思えます。その前に、外来語全般について私の印象と申しますか、考えていることを言いますと、以前にですね、有名私立中学校の入学試験の国語問題というのを、ちょっと調べてみたことがあります。大変優秀で、そこに入るといい高校へ行って、東大に入る人も多いという、そんな有名な私立中学校の問題を3年分ぐらい集めて、調べてみました。そうしたら、ある学校なんです、毎年、外来語の意味を問う問題があったのです。小学校6年生が受験する問題ですよ、国語のね。それで「スケジュール」だとか、「イン

タビュー」だとか、そういうような外来語を「意味は次のうちのさあどれでしょう？」という問題が毎年ありまして、それを見たときに、これはいいのかなあ、と思いました。6年生が、サラリーマンでもあるまいに、「マネージャー」だの「スケジュール」だの、そんなこと知ってるのが国語的に優秀なのだろうか、と。僕はこういうのを知っているから優秀な子だ、と思っている人が、東大まで行ってお役人になって、「インフォームド・コンセント」だの、「アメニティ」だのと言い出すのではないだろうか、というぐあいに思いまして、その問題には私、どちらかという批判的な気持ちを持ちました。でも、また別の考え方もできるなと思っています。例えば私は、さっき御紹介にあったように、小学生に作文の教室をやっておりました。12年間やっておりました。たまに小学生に直に会って、授業することもあります。そういうときに、私たち大人というのは相手が小学生だと思うと、外来語を使ったら分からないだろうな、と思ってしまうのです。それでわざと、たどたどしく、「そのとき、君はすごくびっくりして、ドキドキちゃっただろう」なんて言うんです。試しに、私は小学生にやってみたらどうだろうと思って、「ショックだったろう？」と言ったことがあります。そうしたら断然そのほうが分かったという顔をします。「君も最近調子が悪くて、何だかうまくいかないみたいだね」とか言っても、何を言われているのかわけが分からないような顔をしているんです、小学生が。ところが、「スランプじゃない？」と聞くと、パッと分かるわけです。「ちょっとスランプなの」と答えるんです。小学生だから外来語を使っては難しいだろう、というのも、一方で、案外思い込みで。小学生だって、「スランプ」の世界に生きているわけですから、それを変に言い換えられたって、「このおじさん何を言いたいんだろう」と思うだけなんです。最近の実体験ですが、買い物に出かけるときに、家の近所を少し歩いておりましたら、前から小学校3年生くらいの男の子が二人、学校帰りで歩いてきて、しゃべっている声がたまたま聞こえてきました。その3年生くらいの男の子がこう言ったんです。「インストールとダウンロードとどう違うんだっけ」。私、横を無言で通り抜けながら、面白いなと思いましたけれどね。コンピューターをやっているから、小学生だって「インストール」と「ダウンロード」の話ができるんです。それなのに、小学生相手だから優しく言ってあげよう……、それも変な話なんです。外来語というのは、ある面、使って普通、使わないと意味が通じない場合もあるなど、というようなことで、明治以後ですけれども、「作家別の外来語使用」というのを書き出してみたいんです。それで皆さんのお手元にそれがあつたのですが、私、これをF a xで入稿したときに、このままコピーして出てくるとは知りませんでしたので、自分用の、覚書きのなぐり書きの字で書いたものをお目にかけてしまってすみません。そういうことならもう少し丁寧に書くんですけども。ちょっと恥ずかしいんですが、でもまあ、これ

をお手元においてもらっているほうがお話を進めやすいので見ながら聴いてください。明治の最初に取り上げたのが坪内逍遙。近代文学の最初のほうの人です。『当世書生気質』という作品から探しました。『当世書生気質』というのは、「書生」は「学生」という意味ですから、「現代の学生はこんなふうだよ」ということを書いた小説なので、ことさらに学生が英語を使うというのが、ややユーモラスぐらいに強調して書いてあります。明治時代の普通の人々はこう喋<sup>しゃべ</sup>っていたかと思うと、ちょっと違うんです。例えば、例の3行目に書きました（資料 p. 7）、「ブック」と書いて括弧<sup>かっこ</sup>して（書籍<sup>しょしょ</sup>（しょもつ））。これおかしいですね。漢字は「書籍」と書いてあるんですが、ルビは「しょもつ」なんです。そして「お金がちょっと足りないから、ブックをセルせねばならない」と言う。本を古本屋に売らなければならないというセリフを、学生たちは「ブックをセルせねばならない」と言っている、という、半分ぐらいユーモア小説なんですね。また、例えば、「テンミニツ（<sup>じゅうぶん</sup>十分）」というのがその次の次にありますが、「まだテンミニツほどあるから」と、「十分あるから」と言ってるだけなんです。さらに、「この本はとてもユウスフルだ」とか言っていて、それでこの後ろに括弧<sup>かっこ</sup>して漢字が書いてあります、ひらがなで振り仮名がしてありますが（<sup>いりよう</sup>有用）、この通りの使い方です。この小説の中にこう書いてあるのでして、私が説明したわけではありません。このとおりに小説の中で「ユウスフルじゃ」というセリフがあって、「ユウスフル」をカタカナで書いてあって、括弧<sup>かっこ</sup>があって（有用）と書いてあった。それに「いりよう」とひらがなが付いている、つまりこの書き方によって、知らない人でも意味が分かって読めるようになっているんですね。で、むしろ、「あ、学生はこんなことを言っているのか」という面白さ、不思議さのほうへ話をもっていってるわけです。実を言うと、この「ユウスフル（有用）」のやり方、もしくは、他の人でまた後で出てきますが、漢字で言葉を書いて、そこにカタカナの振り仮名を付ける、というやり方もありますよね。例えば、「時計」と書いて「ウヲツチ」とルビを付けて、「ウォッチ」と読んでくれと。意味は「時計」だよ、というふうに読ませたい。音は一方で伝えながら、意味は漢字で知らせてしまう。このやり方が外来語を最初に取り入れる、とてもやりやすい有利なやり方なんですね。それと同時に、日本語はどうして外来語が取り入れやすいかの答えでもあるわけです。というのは、もともと日本語は、漢語もある意味、外来語であるという話がありましたけれども、漢語に和語を付けて我々はしゃべっているんです。つまり外来語の使い方はそれと同じでいいんです。だから「出発する」という言葉があったら、「スタートする」というふうに漢語のところを変えるだけで、そのまま同じ文法で日本語になってしまうわけです。「到着する」「ゴールする」、そういうふうに使ってしまうのは、漢語

と和語を混ぜて使っている日本人だから、次のを入れやすい、というのがこの書き方から何となく分かります。その下、二葉亭四迷の『浮雲』ですが、二葉亭四迷というのは明治時代に、江戸時代の文章ではどうも近代の小説が書けないな、ということを思いまして、「言文一致運動」というのをして、なるべく文章をしゃべるとおりにしようよと、そういう運動をした作家ですね。もちろん今日の我々から見ると、二葉亭四迷の小説を今読んで、それでもあまり話し言葉にはなっていないな、とか、それでも難しいなと思えますけれども、その時代としてはそういう運動をした人です。その人の外来語を見てみますと、まず全体の印象を一番下に書きましたが、さっきの学生の風俗を描いた小説とは違うので、そんなに外来語は多いと思いませんでした。「スコッチ」の背広、フロックコート、チョッキ、こんなものはそれを言うしかありませんね。ペン、シャツ、ハンケチに至りましてもそうです。どちらかという、学生が気取って意見を口にするところでは、そのカタカナを括弧「 」の中に書いてありました。これは強調しているんですね。ペンやシャツやハンカチを「 」で括っているのは、現代の我々から見ると少し変ですね。“「シャツ」を着た”と書くような単語ではないのですが。“「ナショナル」の「フォース」に列國史”，これ（列國史）は「スキントン」と読むんですね。学生だから言えるんだよ、というニュアンスを伝えたい。だから括弧「 」して書いてあります。強調して括弧「 」の中に入れるとか、横に、点々と。この、点を振るといのは今でも作家はよくやります。そういう強調の括弧「 」だと思います。どんどんいきます、次のページにいきます。尾崎紅葉の『金色夜叉』も見てみました。これも外来語がそう多いわけではありません。当時としてはだいたい普通のもの、ただ、「シャツ」がよく出ます。「シャツ」と「ハンカチ」が、私が調べた中では非常によく出てきます。一番よく使われる外来語はハンカチなのかと思うくらいに。そして「ハンカチーフ」となったり「ハンカチ」になったり「ハンケチ」だったりするところが面白いのですが、その都度ちょっとずつ変わったりしているんですね。尾崎紅葉の『金色夜叉』では「ランプ」だとか「ニッケルメッキ」だとかはそういうふうにはしか言うことができないものですから。「金剛石」とかいて「ダイヤモンド」と、「外套」と書いて「オバコート」と振り仮名を付けるといったやり方が行われています。「ダイヤモンド」はこの小説のキーポイントで、「ダイヤモンド」に目がくらんで、お宮さんが恋人を裏切る話なので、非常によく、何度も出てきます。でも、特に目立つとか、気になるほど出てくるわけではなかったです。そしてその次に夏目漱石を見てみました。結論から言うと、夏目漱石はあまり外来語をたくさん使う人ではありませんでした。あの人は英文学者でありまして、イギリスへ留学に行っている学者ですから、本当は英語ならど

れだって使えるわけですが、世間一般で使う、最近はそれを使うのが普通だというものしか使わないでおこう、と思っていたフシがあります。ただし、この『吾輩は猫である』という小説は、先生の家が舞台でありまして、そこへ教え子たちが集まってくるという、少し知的な学者のサロンみたいなムードがありますので、そういうところではこういう話をしているんだよね、という必要上、「アンドレア・デル・サルト」であるとか、「ギボン」だとか、学生たちの中で出てくる「レオナルド＝ダビンチはさあ」とか、そういう人名のところ、カタカナが普通の人の小説よりは少し出てきます。それから途中に一カ所、最近の西洋料理をからかおうというつもりで書いたらしきところがありまして、「メンチボー」これはメンチボールのことですが、それとか、「クロケット」だの、気取った言葉、そういうの気取っていて嫌だね、ということをはからかうために書いた章があるせいで、「シチュ」「ソップ」「チャップ」という料理の外来語がたくさん出てくるのはそのためです。むしろ、そういうことを言うやつが成金趣味で威張って嫌だなということをはからかうために、友達の冗談で、そういうレストランへ行って、「じゃあトチメンボーをくれ」という有名なギャグになるわけです。「トチメンボー」というのは、明治の俳人の<sup>とちめんぼう</sup>椽面坊という人の名前なんですが、要するに、「メンチボー、メンチボー」と言っているの、そこからからかって、いかにも料理の名前なふりをして「トチメンボーをくれ」と言うわけです。そして店の者が奥へ引っ込んで、コックと相談した結果、「ただ今、トチメンボーは切らしております」という面白いシーンがあるんです。そのために、「シチュ」や「チャップ」があるんだと思ってください。それ以外は普通です。ペンのピアノとかいうものは、そう言うしかないのですから。それに対して、もう一人の大文豪、3ページ目（資料 p. 9）ですが、森鷗外先生は使い過ぎです。ものすごい、使う量が。主にももちろんドイツ語です。医者としてドイツへ留学なさってですね、ドイツ語でドイツ人と論争をして勝ったという、エピソードが伝えられているぐらいに、天才ですから。天才はいいんですが、『舞姫』なんていうロマンチックな小説を書くのに、ここまで使うことはないだろうと私は思いました。もちろん、パリとかフランスとか、ベルリンだとか、そういう地名は当たり前ですし、そうなんですが、一番上に書いてある“「ニル・アドミラリイ」の氣象”とあって、「ニル・アドミラリイ」というところに、注を見よというマークが付いていたので、私はその小説の一番最後の注を見ましたら、「ラテン語で、何事にも驚かないという意味」とあります。もともと最初に出版された舞姫には、その注もなかったはずですよ。いきなり「ニル・アドミラリイ」と言われても困りますよね。「ビール」や「ラムプ」は当然なのですが、“「コルポルタアジュ」と唱ふる貸本屋”，注を読むと「行商」とありましたの

で、何のことはない、「本をかついでいる貸し本屋」というふうに思いましたが。学者で医者でもありますし、軍人でもありますし、嫌味な感じの人ではなかったと思いますが、少し外来語を使って知性をあらわにしすぎた人ではないかと私は思いました。しかしながら、私の意見はどちらもでもいいのです。事実だけを聞いておいてください。ではその次へいきまして、谷崎潤一郎さんの『細雪』を見ました。私の感じでは、今日ではもうそっちを使うのが普通だろうと思われるような外来語が中心だったと思います。ピアノ、サラリーマン、ボーナス、ビルディング、パーマでセットする、だとか、アパート、ハンドバックとか、まあ普通ですね。ただし一つだけ、谷崎で注意するところがあります。この中に、「ホテルのロビー」というのがあります。それから「タクシー」というのがあります。これは「タクシー」のことです。また、一番下に「アルコール」「アンプール」とあります、「アンプール」というのは「アンブル」のことです。注射の薬剤が入っているガラスの小さな小瓶のこと、まあ、今はそんなものはありませんけれども昔はありました。それは「アンブル」と言いました。というように、変な医学用語と金持ちしか行かないようなところの世界の用語がこの小説には、変にちりばめられてありまして、お金持ちがうらやましくなるような小説なんです、『細雪』というのは。この小説を読み始めてすぐ、私が、昔読んでショックを受けた言葉は、大阪の芦屋の人ですが、「そやった、あたし『B足らん』やねん」というものでした。「B足らん」は、私にはとてもショックでした。これは戦前の昭和13年ごろの舞台の小説なんです。それなのに、この家では、ビタミンBが欠乏すると頭痛がしたり肌が荒れたりするので、自分たちで「あたし『B足らん』やねん」と言って、ビタミンBの注射をお互いにし合うのです。何というお金持ちなんだろうとびっくりしました。私は戦後に読んだのに。というように、谷崎の外来語の中には、お金持ちでしょう、上流階級でしょうというのを、におわすようにいくつかの外来語が入っているのが特徴です。もちろんこの『細雪』などは特にそうですけれども。それで志賀直哉にいきます。志賀直哉についての私の感想は下に書いてあります、「そう多くはない」とありますが、そこに豊かさを出したいところに出てくる傾向、これは似たようなことですね、谷崎と。上で言えば、「赤皮のポオトフォリオ」だとか、「マチネー」劇場の昼興行のことですね、「コレクション」「ホテル」、この辺の言葉は、今は普通ですが、これも戦前だということを考えて、「おおー、お金持ちはそういうものを食べたり、着たりして、そういう生活をしているんだ」というニュアンスがあります。これは別にですね、一念のために申しておきますと、これらの作家が見栄っ張りでお金をもっていることを自慢するような嫌な人だったということではありません。最近はそれほどでもなくなりましたが、大正・昭和の頃というのは、小説に求められるものの一つに、憧れの生活というものが



あったんです。「ほお、大学教授が、帝国ホテルでカフェを飲んで」と書いてあると、「はあ、帝国ホテルで、カフェを飲むんだ」と憧れる。そういうような、小説や小説家の中に、上流社会みたいなものを紹介するという文学的な価値が確かに昔はありました。どちらかというところ、そういうところに外来語が出てくるケースが多いのではないのかなと思いました。次に、川端康成さん、この人は普通ですね。『雪国』からとったということを考えなければなりませんけれど、例えば『東京の人』からとったらもっと違うのでしょうか、けれども雪国だから、トンネルだの、バラックだの、ラッセルだの、スチムだの、プラット・ホームだとか、普通にそう言わないとしょうがないものを、この作品では使っていたと思います。三島由紀夫さんにいきますと、少し、今度は知識、学識を誇るようなものの傾向があると思いました。例えば、「エロティシズムの論理」というのは、今、聞くと別に驚きませんが、この時代には、「何か難しいことを言ってるな」という感じがしたと思います。学者っぽいとか、学生っぽいとか、この例の中のチューリップだの、スイートパイだの、アネモネだの、こう書かなければしょうがないのですが、「ステイブル・ファイバーの手拭ぬぐい」を書くことはないですね。ちょっと気取ってるんですね。「エウリュディケーさながら」、これは私は、意味が分かりませんでした。昔は分かったのかもしれませんが、今は分かりません。この辺は、はしょっていきますね。現代に近いほうが面白いですから、このへんはとびます。私が書きました6枚目で、資料の12ページです。この作家を知っている人は少ないかもしれませんが、龍膽寺雄りゅうたんじゆうという人ですね、まず。川端康成などと同列のところにいる、新感覚派のモダンな気取り屋作家で、ちょっと変人だった人です。ですから、この人はその当時のカッコいい外来語を使って、現代から言うとはずれているという感じの人でした。今「ペーブメント」とはあまり言いませんけれども、この人は「ペーブメント」をいっぱい書いておりました。括弧して「多謝メニサンクス」と書いてあったのは笑いますよ、なぜこれは括弧「」してあるかというところ、ヒロインのセリフなんです。男にちょっと親切にしてもらっただけで、「多謝メニサンクス」と言いやがったそうなんです。ちょっと気取ったことを書く作家でしたから、そういうものも出てきます。要するに、これはこの時代にかっこいいじゃないというところ、外来語を使っているんです。大岡昇平さんあたりからは、だんだん戦後になってきます。大岡昇平さんはフランス文学の人ですから、コケティッシュだとか、結構フランス語っぽいものが出てきたり、ハンディキャップ、ペダンチズム、といった、かなりモダンな、利口そうな知的な外来語を使っていると思います。では、次のページにいきます。獅子文六ししぶんろくという人も、今はあんまり記憶されていないの

ですが、戦後の国民小説を書いた、大変ユーモアのある作家です。この『青春怪談』、これなどは、明らかに、戦後の若いのが変な外来語をやたら使うね、ということを表したいがための使い方です。ローション、クリーム、パフ、これは化粧のシーンに出てくるのですが、サルーン、ホルモン、デパート、ルンペン……、懐かしいですね。外来語でも、聞いただけで、懐かしさを覚える外来語もあるんですね。それからもっと戦後が進みますと、大江健三郎さんです、私、大江さんは東大出の難しい人だから、難しい英語をいっぱい使っているのかと思ったら、今ではもう普通だよ、というものでした。コンクリートだとか、ゴムだとかは別といたしまして、やや目立つものが「メカニク」。確かに、これは戦後の大江さん世代じゃないと使いませんね。「ショック」だとか、大江さんもやはり「ハンカチーフ」が出てくるという。はい、その次が、あと4人ですか。多過ぎますね。吉行淳之介さんはもう印象だけで語って、どんどんいきます。「イメージ」なんていうのは、この時代にしては新しいかなと思いましたが、普通にロマンチックだとか、クラブだとか、グラスだとか、お酒関係が多いですね、普通だと思います。石原慎太郎さんは使い過ぎでした。『太陽の季節』、特に、スポーツのシーンとナイトクラブなどで遊んだりするシーンで、めっちゃめっちゃ使うことによって、今っぽいジャズのような感じを出そうとしている文章なんですね。だから主人公がボクシングをやっているせいで、リング、ステップ、ラウンド、セカンド、ゴング、ウィービング、バスケット、パスワーク。スポーツの用語をがんがん書くと、すごくナウかったんでしょうね、この当時は。ジャズのようなリズムさえあって、「ああ、新しい人が出た」と思われたと思います。そこにちょっと特徴を感じました。全体のムードを創るがために意識して多く使った外来語という感じがしました。それからさらにさらに、両村上さん、このぐらいになってきますと、現代の子はこのくらい使っているよという感じですが、ものすごく多くなってきます。まず村上<sup>りゅう</sup>龍さんですが、多くなってはきますが、学識を誇るためでも、豊かさを誇るためでもなく、今こういうふうに言うじゃない、という、今を感じさせたいがために使っている、そういう感じですね。ブリーフケースというのはカバンのことだけれども、スイミングキャップ、ハイヒール、ハイヒールは昔でも使えますけれども、トイレの個室のことを「ボックスを開ける」と、「個室」と言わずに「ボックス」と言うように、今そう言うじゃん、という傾向の使い方です。知識誇りではなくて。もう一人の村上さん、村上春樹さん。この人も、私は普通だろうなと思います。ヴォリュームだの、キー・ホルダーだの、当然の現代の日本語ではないでしょうか。最後あと二人です。吉本ばななさんの『キッチン』は、現代をさらに上手に表すために、パワーとかクールとか、「ダッシュした」とか、「ベストだ」「オープンな性格」「リ

アルに見えた」，こういうふうには、今の若い子の言葉遣い、そのものに入っている使い方。そして町田康さん、これはオチですが、『パンク侍、斬られて候』という小説で、時代劇なのに「パンク侍」、いきなり外来語侍ですからね。それで時代劇なのに、「レベルが違うと思うよ」なんて侍が言うんです。これは明らかにわざとねらってこう書いてるんですね。もういいじゃん。そういうことを言いたいよ、今の若いのは。ここまでくると昔しゃべった通りに時代劇を書かなければいけないというのを乗り越えて、現代のぼくらの言葉に直しましたという書き方なんです。面白いです。使い方が広がっている。侍が言うな、みたいな感じもしますけれども、「このエリア」。「拙者、このエリアでは多少名が知られており」と言うのです。そこまで至っている。今はこう言ったら分かるじゃん、こう言ったほうが分かるじゃん、という言語への挑戦のような壊し方のような外来語でございました。最後まとめです。明治時代、大正・昭和時代、戦後といろいろ書きましたが、これ全部やってると長くなりますので、三つあるな、と感じましたことを申し上げます。外来語を作家が使うのは、一つは、今の時代こう変わりました、ということを表したいときですね。もう一つは、少し恥ずかしい精神構造かもしれないませんが、私ども知識階級はこのくらい言葉を使うんですよという学識、知識誇りにも使います。意外と途中でありましたね、裕福である、上流階級である、リッチであるということはこの小説から、主人公たちが豊かさを感じさせたいときにも出てきます。そして最初に言った、今の時代に似ているのですが、「私は現代を書いているんだ、ナウいでしょう」というところを書きたいと、外来語が出てくる。そして結論から言いますと、最後の「ナウいでしょう」のつもりで書いた外来語は、10年たつと古いです。そこが一番早く古びてきます。新しく書いたつもりでも、10年後には、そういうほうがもう古いじゃん、というふうになってきています。そこが、要するに、外来語というのは、新しさも出せば、古くも感じさせる、面白いもので、でもいずれにしても、小説の中で普通に書こうと思って外来語を使わないわけにはいかない。入っているのが普通で、これから、どちらかと言えば増える傾向にあるのではないかなと思いました。どうもありがとうございました。以上でございます。

**司会** ありがとうございました。それでは、最後に名古屋外国語大学学長の水谷修さんより「外来語をとりかこむもの－外人、外来もの、外来文化を考える－」と題しまして、お話しいただきます。水谷さんは、日本語学、日本語教育が御専門で、国立国語研究所の元所長でもあります。現在名古屋外国語大学の学長を務めていらっしゃるほか、日本語教育振興協会会長、NHK放送用語委員会委員なども務めていらっしゃいます。それでは水谷さんよろしくお願いたします。

## ● 「外来語をとりかこむものー外来人，外来もの，外来文化を考えるー」

水谷 修 （配布資料：p. 18～20）

水谷 担当者のほうから、25分で必ず終われ、と言われました。せっかく今、具体的なお話で、いろいろお考えになるチャンスが生まれてきたのに、たぶん、私の話は抽象的な方向へまた戻してしまう。申し訳ないと思いますが、それでもやはり考えるために、私たちはいろんな面からの可能性を追求する必要があるだろうと思います。「1000年を超える時間で考えてみよう」ということが、一つのテーマにあります。こないだ9月25日ですか、6カ月にわたって開催されました万博が無事に終わりました。大成功だったと思いますが、予想をはるかに超えた入場者の数もそうですけれども、何よりもうれしかったのは、この地域の人たちを中心として、数多くの人が繰り返し会場を訪れた。そして会場に来られる各国の人たちと話をするという、海外旅行なんかの場合では旅行会社がつくりますと、外国へは行くけれども、通過してくるだけということが結構多いわけです。それに比べて、直接その国の人と話をする機会を得て、ものを見て、会話をし、というチャンスが生まれたことは、外国の文化やあるいは社会に、一步も二歩も入り込んだ、そういう経験を多くの人々が得た。それがすばらしいことだろう、と僕は思いました。国際的な問題を考えるときに、私たちはどうしても遠いところにあること、あるいは直接縁はないもの、という感覚で捉える。外国から何か入ってくるということも、何か遠くにあるものが、ということで考え始めてしまう傾向があると思います。実際はもう、21世紀の現代は、そういう時代ではなくなっている。非常に身近な足元にも国際的な問題が忍び込んできている、ということが大事なことだろうと。グローバル化の現実、私たちの日常生活の中に確実に入り込んできていて、食べ物一つとっても、外国への依存なしではやっていけなくなっている。今、日本とアメリカの間では牛肉の輸入をめぐるまだ決着がついていないようですが、その他にも野菜や魚介類でも中国産・韓国産がスーパーにズラリと並んでいます、こういった問題が私たちの周辺に、じわじわと押し寄せてきているんだと思います。言葉の問題も、このグローバル化の波を受けるのは当然の成り行きだということです。外来語の問題がこのところ急に大きな話題になってきたのは、日本社会自体の国際化が激しく、しかも急激に進んできている、そのことが原因だろうと思います。外来語の問題は、先ほどの話にも出てまいりましたが、明治時代にも、またそれよりもずっと昔、ポルトガルの宣教師などが日本へやってきた頃から存在しているわけですが、現在の外来語問題は、明治期や室町期とは根本的に異なった状況下にあると私は考えております。明治時代と比べると、例えば、外国語、外国の人や物に接する機会が、今は圧倒的に多くなっています。国民

の一部の人ではなくて、国民全体が、しかも日常的な段階で、問題を起こしてきています。こういう外来語の問題に対しても、我々が考えなければならない状況であり、課題であろうと思います。先ほど少し触れましたけれども、万博「愛・地球博」の会場にも出品されておりましたが、8世紀に中国、唐の国に遣唐使として渡った「井真成」という人の墓誌が、昨年の秋に西安の近くで発見されました。印刷物の19ページに、鮮明ではありませんが、コピーの写真が載っております。実物は色が真っ白です。非常に白い大理石だと思うのですが40センチ四方ぐらいの、これぐらいの大きさの墓碑でしたね。多分皆さんの中にも地球博へいらして御覧になった方も多いただろうと思いますが40センチぐらいのタテヨコほぼ真四角、真っ白な石で、名前などいろいろ文が書いてあるわけですが、井戸の「井」ですね、真成というのは真実の「真」と成功の「成」です。「井真成」として書いてあります。この「井」という文字の読み方については、いろいろな意見が歴史関係の人から出ておまして、やれ、「セイ」だ、いや「ショウ」だ、「イ」でいいんだ……、などというような様々な意見が出ております。そして、「国は日本と号する」という文がよくその印刷物では見えますでしょうか、3行目でしょうか、たぶん、これが初めて、「日本」という国名が、最初にですね、使われた例だろうと思います。それから、その後いろいろ書いてあって、日本から国の命令で中国へ来たこと、そして大変な才能の持ち主だったこと、高い官位、「五位」だったと思いますが、ということ、そして残念なことに36歳で亡くなった、というようなことがそこに書いてあるわけです。亡くなったけれども、魂はやがて日本に帰るだろうと、そういう内容の文でした。実は、私は日本の新聞にこの墓誌発見の報道があったその直後に、新聞記事は見ないままで西安に行っていて、たまたま、この墓誌を見つけだした西北大学の博物館の先生に案内され、その西北大学の博物館で実物を見せてもらっていたんです。恐らく、この井真成（イ・シンセイ）という人は阿部（あべ）仲麻呂（なかまろ）や吉備真備（きびのまきび）と一緒に遣唐使として中国に渡った人だということでした。阿部仲麻呂や吉備真備のことは子供の頃から知っていましたが、井真成（イ・シンセイ）というのは全く知りませんでした。「イ・シンセイ」と言うべきか、「イ・マサナリ」なのか分かりませんが、その万博のあと、この墓誌は東京の国立博物館、現在東京国立博物館で展示されていて、その後、奈良の国立博物館、それから九州の国立博物館でも、展示されることになっています。すでに歴史関係者の中ではこの墓誌をめぐる大きな議論が巻き起こっているようです。中国式の姓、名字だという意見に対して、日本式の姓だ、和姓だ、という主張などがあって、本も出版されております。しかし実は、私にとって最大の衝撃は、目に入ってきた40センチ四方の墓誌の左側半分、このコピーですとそれほど広くはないのですが、印象としてはもうちょっと広い、何も書いてない部分、それが

非常に気になって、博物館の先生にどうして左側に空白があるんですか？ と尋ねました。すると答えは、普通留学生の墓誌の場合、左側にはその国のその人の出身国の言葉で同じ内容のことが書かれているんですよ、という説明があったんですね。734年ですから、このときには日本語の正書法はできあがっていなかったのだろうか。万葉集は790年ごろにはできあがったと言われていていますから、まだ書き言葉はできあがっていなかったのか。話し言葉として日本語はあっても、書き言葉は中国語で行っていたのだろうか、と、考え込んでしまったんですね。それからその後、日本の中では、中国から入ってきた中国語と漢字を使いながら、日本の言葉を訓としてあてはめていった。漢語、中国の音を音として位置付けるという、現在の我々からすれば、非常に不便なくつもの一つの漢字、生きるという字には70いくつも読み方があるというような、苦勞をしているわけです。現在の日本語の実態は、逆に考えると、当時の日本人が中国から来た文字と音に必死になって取り組んだ。そしてものすごい努力をし、長い年月にわたって努力した結果が現在の漢字を使い、音と訓を用意し、その文も書き表すというシステムだった、そういうやり方だったんだと思うんです。現在の私たちの直面している外来語問題は、この8世紀前後以降の外来語問題に比べれば、それほど絶望的ではない。努力をすれば、解決の道が容易に探しだせる状態なのだと言えるかもしれません。しかし放置しておけば、取り返しのつかない悲惨な実績を歴史の中に私たちは残してしまうかもしれませんね。8世紀の前後に、文字も外国語としての中国語そのものも入ってきた状況、それに比べれば現在の日本語は文字表記も語彙の体系も十分すぎるほどもち合わせていると私は思います。外来の言葉をカタカナで表記しようというやり方、それも簡単に容易に見つけだしているわけです。もっとも、それだけ気楽に日本語の体系の中に外国語を取り入れていくということの結果は、どんな問題を生じさせるか、想定することが困難なぐらい、私たちは子孫に問題を残してしまうかもしれません。少なくとも、現代の日本語がもっている外国の言葉の受け入れ態勢、これは他の国にも類を見ないような強いものだと僕は思っております。中国が、今、外来語に対してかなり困り始めていると思います。非常に上手に、中国は外来語を入れますけれども、どうやら限界に達して、イメージと音を上手に結び付けるということは行き詰まってきたようですね。中国語にはカタカナ、仮名はありませんから、どうするのかなあと思っています。さて、人の移動と人の求めるものが言葉を変える、といったことに入り込んでいきたいと思いますが、今世界中で日本語を学習している人の数は235万人ほどいると言います。過去に勉強した人の数も含めれば2000万人を超えるかもしれません。しかしこの人たちは、日本語そのものを変えていく力は、あまりもっていません。今存在する、日本語を身に付けて何かの役に立たせたいと考えている人たちが圧倒的に多いわけですから、日本語

の中に外来語を増やそうと考えることはほとんどありません。むしろ多くの外国人・日本語学習者にとっては、日本語の中の外来語、カタカナ言葉が学習の邪魔になる、と主張しています。英語国民も日本語の中の外来語には困ると言います。「コロンブス」と言っても、英語の”Columbus”とはかなり異なった発音ですから、同じ言葉と認知することはかなり苦勞があります。また、現在日本には200万人近くの外国人が住んでいますが、この人たちも日本語を変えるほどの影響力はままだっていません。しかし、それは絶対数が少ないからであって、1000万人、2000万人という数になってくれば、影響なしということでは済まされないだろうと思います。少子化が進み、労働力などを外国人に頼らなければならない状況が深刻化すれば、日本在住の外国人は必ず増えてくるはずで、もしかしたら、そのときは、今とは異なった形で外国語が日本語の中に入り込んでくるかもしれません。奈良時代には、前に読んだことがあるのですが、渡来人、外国から来た人が2割から3割はいた、ということを読んだことがあります。もし日本の総人口の2割3割が外国人になったときに、もし日本語の教育がそこで普及しなければ新しい問題が出るかもしれません。50年先、100年先にいったいどうなるのか。現在では、日本人は単一民族であるということはいわれますけれども、実際には数多くの人種が混合してできあがってきているという考え方が一般化しています。常識化していると言えます。多くの異なった種族が北方樺太方向から、また朝鮮半島を通り、また南方からこの国にやってきたと言われていています。各地の地名にもそれを裏付けるものが残っているようです。例えば、越、こしの国、越前越中の越ですが、海を渡ってきた人たちが作った国だと言われていていますし、近いところでは三重県の度会郡というのがありました、今でもありますね。度会郡は渡来人の土地であるはずで、<sup>しん</sup>秦の始皇帝の秦という、10ページのところに少し並んでありますけれども、この「秦」という字を苗字として名乗る人たちもいます。それを音は同じ「シン」で「進」という字を利用してしている人もいます。さらに「秦」という字で「ハタ」と読む名字をもっている人もいます。さらに「ハタ」というのは今度は字を変え、畑の「畑（ハタ）」を使う、あるいは「羽田（ハダ）」の単語を使う、少し前の総理大臣もいたわけですね。信州まで外来人の系列は伸びていたんだろうと思います。そういえば、「熱田」のことを「蓬来<sup>ほう</sup>の島」と言ったそうです。「名古屋城」を「蓬左城」と言った、徐福が本当に名古屋に来たかどうか分かりませんが、外国から人が移り住んでいたことを指し示す証拠だと言えらるだろうと思います。多くの外国から来た人たちが住んでいる土地で、その土地にあった言葉と持ち込まれた言葉がどのように溶け合っていたのか、今となっては手がかりもありませんので、想像することも難しいのですが、常に外国語問題、外来語問題が存在したのには相違は

ありません。現在の日本語の外来語の問題では、英語から入ってくる言葉が圧倒的に多く、人々の目は完全に英語に向かっていますが、今後、中国や韓国との交流が深まってくるのであれば、例えば中国語の簡体字が入ってきたり、韓国語の料理名や野菜の名前が広まっていく可能性もないとは言えません。先週、<sup>かみやしろ</sup>上社の<sup>ちあみ</sup>北の方地網、というところで、ある診療所の看板が出ておりまして、診療の「療」の字が、やまいだれに我々が普通に使うつくりではなくて、簡体字の、中国の簡単な字ですね、それが大きな看板として出ていました。もしかすると簡体字が入ってくる可能性があるかもしれませんね、分かりません。さて、一番外来の言葉が入ってくる手がかりになるのは、物でしょう。カップとかタバコとか、ああいう類のものは明らかに、物と一緒に入ってきました。ちょうど、そうですね、今から10年以上も前のことになりますが、お米が凶作で大騒ぎをしたことがありました。急遽政府は外米、タイ米だったと思いますが、それを輸入して問題の解決にあたらうとしました。外米を輸入したことまではよかったのですが、その後の手の打ち方がまずくて大きな失敗をしました。こともあろうに、タイ米と日本米をブレンドして流通させたんですよ。タイ米、まあインディカ米というのも日本米、ジャポニカと言いますか、ジャポニカ米も同じお米には違いないのですが、性質はまるで違います。したがって料理の仕方も全然違います。それを一緒にして、日本式のごはんの炊き方で食べればうまいわけではないのです。この騒ぎのおこる2年ほど前に、当時農水省の新種命名委員会というのがありまして、それに出ておりまして、その委員会では、実はその頃、盛んになっていたフランス料理やイタリア料理の高級店で、外米を使っていたんです。それを輸入していたのを、日本でも作ったほうがいいたろうということで品種を開発したんです。それほどインディカ米は需要ができていたんです。ところが、タイ米を輸入したときに、それまでに日本産の米をいろいろブレンドして扱っていましたから、それと同じやり方で外米と一緒にしたんでしょう。そういうやり方、外国のものを日本の社会に取り入れていくときには、ともすると、自分のもっている物差しで処理してしまおう、と考えるのは、理解できないこともないのですが、間違った結果を生み出してしまうということもあるのだと言えると思うんです。お魚の名前の付け方にも興味深いものがありまして、次のページ（資料 p.20）ですね、最近はあまり目にしなくなったのですが、「ピラニア」という南米産の魚、あの、馬でも殺してしまうというアマゾンの魚ですが、一時期日本によく入ってきておりましたね。高級料理店でも結構よく出てきたりしておりました。これが養殖されて食用に供される料理店で、店に出てくるときの名前は、「泉鯛（イズミダイ）」と言っていました。鯛という言葉を使うと、私たちはどこかでほっとしてしまうのでしょうか。「ギンダラ」という魚は、今で



もスーパーに行くと売っております。これも遠くから来た魚で種類としては実はタラではない。「セーブルフィッシュ」という別の種類の魚ですね。タラという言葉を使うことで、買う人に安心感を与えるのかもしれませんが。「オキアミ」というのも、実はアミの仲間ではないそうです。こういった日本式の言葉で命名するのは、反省も最近は起きているようで、外国の名前をそのまま入れたほうがいいだろう、とも言われております。でも、受け止める私たちの感情、気持ち、考え方は、一体どうなっていくののだろうか。中華料理で使う「香草(シャンツァイ)」という野菜があります。もしかしたら召し上がったことがあるかもしれません。強烈なおいで抵抗を感じさせますので、多くの日本人は好きではありません。ところが不思議なことに、「コリアンダー」という名前で、フランス料理に添えられてくると、抵抗感はなくなってしまうみたいです。これは言葉の魔術でしょうか。カタカナ言葉の魅力でしょうか。カタカナ言葉を使って魅力を感じさせる、日本語を使って安心感を誘う。外来語を使う人々の心の中にあるものは、魔力さえ感じさせるのではないか。そう思う面もあるのですが、ファッションの言葉に外来語が多いのも頷けますし、権威を示すために外来語を使う可能性があることも否定できません。自動車の名前などにも圧倒的に外国語らしい名前が付けられているのも、国際的な規模で販売しなければならない、という状況もあるのでしょうけれども、ある種の美意識がそれを支えている、というのも確かなようです。大変細かい話になりますが、外来語の発音の仕方でも気になっていることが一つあります。「デジタル」という言い方がごく一般的に使われていますが、なぜ「ディジタル」と言わないのでしょうか。「ティールーム」を「テールーム」と言ったり、また「ピーティーエー」を「ピーテーエー」と言ったら笑う人が、「デジタル」と言っているのは、ちょっとよく分かりません。つまらぬことにこだわってしまいました。おしまいの一つだけ、簡単に自分の一番言いたいことを申し上げて、終わりにいたします。ここまでずっと外来語をテーマに取り上げましたが、外来語そのものではなく外来語の周辺の問題について、お話を進めてまいりました。外来語の問題は確かに、外国語とのかかわりの中に生じてきた問題ですが、一番問われているのは、自分自身の使う日本語の問題なのだと私は思っております。杉戸さんがおっしゃったことにもつながると思うのですが、自分の言葉の問題、国語研究所が中心になって実施している外来語の日本語への言い換えの仕事も、どこまで自分自身もっている言葉、日本語で事実を把握し、伝えていけるか、それを追求しようとする挑戦だと私は考えています。魚の例ではありませんが、外国語のまま受け入れ使用したほうが、事実を的確に把握し、伝えるためには有効である場合もあるでしょうし、逆に日本語の中に存在する、例えば、差別観を排除するために外来語に依存することが有効な場合もあるはずで、千何百年も前に、我々の祖先が、苦勞を積

み重ねて作りあげてきた日本語を、我々は明確な言語観、未来の言葉を目標として、まず自分達のもっている言葉の可能性を徹底的に追求する責任があると思います。自分のもっている言葉をどれだけ大切にできるか、どれだけ意識化して活用する能力を身に付けているかが、問われているのだと思います。時間がなくて触れることはできませんでしたが、グローバル化が激しく進む時代、この地球社会では、外から来る言葉にどう対応するかということだけではなくて、外へ向けて日本語をどう発信していくかということも言語政策を考える上では欠かせない課題だと考えております。これでお話を終わらせていただきます。

**司会** ありがとうございます。以上で講演の部を終わります。予定より少し休憩時間を短くいたしまして15分間の休憩といたします。前の時計で3時30分になりましたら、質疑応答と全体討議を始めます。どうぞ休憩時間ロビーにございます展示品などを御覧ください。またこの時間に質問票を回収いたします。3人の講演者の方に質問のある方は質問票にご記入の上、係の者にお渡しください。なお手洗いは、そちらのホールを出まして右手一カ所、左のところを出まして、本館のいったところにもう一カ所ございます。それでは、ただいまより休憩といたします。

<休憩>

## ●質疑応答

**司会** 時間になりましたので後半の部に移ります。皆さまからたくさんの質問票をいただきましてありがとうございます。時間の関係で大変申し訳ございませんが、すべての質問にはお答えできませんこと、予め御容赦ください。いくつかの質問、それぞれの講演者の方々に御紹介していただき、答えていただきます。それでは最初に杉戸さんお願いいたします。

**杉戸** お名前がないのですが、「外国にも外来語問題というのがあるのでしょうか？」というお尋ねです。例えば中国、アメリカ、フランスなどで、そしてそういう問題が存在するとすれば、どういう問題として捉えられているのか、というお尋ねであります。1年前、去年の3月ですが、私どもの国語研究所で外来語をテーマにして国際シンポジウムというのを開きました。そこには、お隣、韓国・中国はもちろんですが、アフリカのタンザニアから、それから北欧のアイスランドですね（アイルランドではなくアイスランドです）などから、それぞれの国の外来語問題を持ち寄って発表してくださる方が集まりました。そこでのことを思い出しながら話します。本当に、いろいろな種類の外来語問題が、それぞれの国にあるようです。例えばタンザニアです。ここは、かつてイギリスの植民地ですね。イギリスを宗主国とする地域でした。それで、ずっと公用語、特

に教育も全部英語でされてきていました。それがはずれた後、スワヒリ語というアフリカの共通語に当たる、その現地の言葉でいろいろなことを始めようとする。特に教育ですね。それも高等教育の専門部、医学とか工学、そういった専門の言葉を用いるそういう教育も、それまではずっと英語だったところを、スワヒリ語でやろうという、そういう苦労がある。しかし始めた後、そのスワヒリ語だけではなかなかうまくいかない面が出てくる。また、そこで新しい意味の英語も含めた外来語問題が起こっている。そういう話がありました。目下言葉の面では動きが非常に激しく、そして苦労もあり、多様な問題が見えてきているということでした。また、別の一つの例として、これは専門教育における外来語問題が訴えられました。アイスランド、これは全国民20万人くらいの小さな国です。そこは、アイスランド語というその国の国語ですね、その民族の言葉を非常に大切にしようとしていまして、その周辺に、デンマークとかスウェーデンとか大きな言葉の国があります。そういったところからすぐに外来語として色んな言葉が入ってくる、それを何とか食い止める、純粋なアイスランド語を残すための国語運動もあり、あるいはその研究所も独立してできているようなところでもあります。その動きが紹介されました。そのとき、私が印象深く覚えているのは、そういう、そのアイスランド語を純粋なものとして残そうという努力と併せて、他の言語、デンマークとか、スウェーデンとか、あるいは英語とか、そういった他の言語もきちんと国民のすべてに教育していくという、多くの言語ですね、「多言語政策」というのと並び併せて、その母国語としてのアイスランド語を大切にしようという、そういう動きをしているんだと、そんな紹介がありました。そういう国がありましたという御紹介だけですが、その二つとも、私にとっては日本ではかつては経験したかもしれないけれども、今忘れていたような、そういう問題をそれぞれの国がもっている、抱えながらも言葉で格闘している、とそういう印象をもった次第です。もう一つ手短にお答えする質問になります。「外来語言い換え提案、委員会提案を始めた意図を聞かせてほしい。今後どのように実施していくのか聞かせてほしい」。それから、お願いと書いてありますが、「研究所の小冊子を公立の図書館、大学の図書館にぜひ配布してほしい」ということです。「外来語言い換え提案」ですが、11月7日締め切りで、第4回目の中間発表したものについて、皆さんからの意見をお待ちする期間が終わります。そうしますと、その4回目の本発表に向けて、年明け早々にも発表したいと思っておりますが、4回目の提案をしようと思っております。そしてその後は、専門領域ごとに、例えば「環境」とか、あるいは「福祉」「介護」ですね、そういった領域ごとに言葉を選んで、そして同じような工夫の提案を続けていきたいと、そんなふうに考えています。これは当然続けなければいけないだろうという、問題になりそうな言葉がたくさん挙がってきています。それを少し専門領域ごとに、言

葉のお互いの関係を意識しながら体系的なことも意識しながら考える、そういう提案ができていけばいいなと思っています。それから、研究所の小冊子、これは「言い換え提案」の小冊子なのか、研究所のいろいろな資料なのかは分かりかねるのですが、公立の図書館、大学附属図書館、これは原則として今もお送りしております。ただ、大きな大学でも一冊だけ、とか、そういうふうにしお送りできていない面があります。個々の先生方、あるいはその関係者の手元に直接届くというわけではないので、申し訳ないのですが、最近、例えばこの「外来語の言い換え提案」ですと、インターネットの世界で利用していただけるように、国語研究所のホームページ、今日の、いくつかの資料にアドレスというのを示しておりますので、それを使っていただければ「言い換え提案」のかなりの分量の情報が御覧いただけると思っています。ありがとうございました。

**司会** 続いて、清水さん、お願いします。

**清水** お名前のない方の質問です。清水の小説、つまり私の小説における、外来語使用状況はいかがですかという問いです。拝見する限りではあまり目立たないようにも思いますがと。多分私はどちらかと言えば、現代の作家にしてはあまり使わないほうだと思います。普通の日本語で言えることは言おうと思います。ただ、今の流行っているものを書かなければならないというときは当然書きますが、特に多いほうではないと思います。面白い例なのですが昔、『金鯪（きんこ）の夢』という時代小説を書きまして、豊臣秀吉の時代からずっと江戸時代にかけての小説なんですけど、これはユーモア小説であるし、かなり笑える小説で、私、時代小説をかける知識があまりあるわけではないけれども書きますというつもりで書き始めました。そうすると、これ時代考証が間違っているぞとか、こんなこと昔の侍は言わないという声が出るのではないかと。いっそ最初にギャグだということを分からせてしまえと思ったことがあります。豊臣秀吉に赤ん坊ができて、子供が生まれるというシーンでは、わざとそこで「秀吉はガッツポーズをとった」と書いたことがあります。戦国時代の人がガッツポーズをとったんですから、あとのことは許して見逃して下さいというために、わざとそういうふうを描いたのは町田康さんの『パンク侍』につながる話だったかなと思います。それから、他に二つ質問があるんですが、一つのほうは、「作家による外来語の使用は、その主題・文体によっても異なると考えます。例えば、柳田国男の作品には外来語は少ないはずですし、谷崎の王朝物もその例に入ると思います」という質問ですが、これは全くその通りでございます。今日はどちらかと言えば、その作家の現代小説であったりして、書いていそうなものを選んで、そこからどういうものを使っているかを出したのであって、王朝物を書くときは外来語は出ませんね。ということで、もう一人、別の方の「1冊の本、または1ページで外来語の使用パーセントはどのぐらいがよいでしょうか」という御質問が

あります。まさにこれは、そのテーマによって違うというところで答えになってしまっておりまして。現代の冒険野郎がアメリカへ行って、ボクシング習って、サンドバッグ叩いて……、という小説を書けば、外来語が多くなるのは当然ですし、王朝文学を書けば、少なくなるのは当然です。現代の普通の小説を書くと、現在我々が使っているくらいのパーセントが一番いいのかなと思います。

**司会** 続いて、水谷さん、お願いします。

**水谷** こういう質問です、「日本語は漢字を借用して発展確立してきましたが、ずいぶんいいかげんな使用の仕方があると思います。中国語の何時代の意味、古い朝鮮語との関係をもう少し、学者が研究して明らかにしてほしいと思いますかどうか」。ごもっともだと思います。これは、難しい問題を抱えています。朝鮮半島の歴史に関連して、私たちは少なくとも「くだら」という読みで、「百済」を覚えた。続いて「しらぎ」という読み方で「新羅」を覚えました。しかし、今は高等学校の教科書ではそう書いてないんです。「新羅（しらぎ）」でなく「新羅（シンラ）」だと。「百済（くだら）」ではなく「百済（ヒャクサイ）」と書いてあります。ほんとにそれでいいのかと。もちろんなぜ「くだら」と読むようになったのかも分かっていない。なぜ「しらぎ」になったのか、これも本当の意味で明白になっていない。でもきちんと追及していかないと、説明がつかない原語主義で、現代の韓国を読むというのも、分からないままに身に付いてしまっているということが結構あると思います。それから外国語として使われる日本語「ツナミ」「スシ」などは本来の日本語とは違う用途があると。日本で使われる外来語は、日本での理解を広げることが大事でしょうか。外来語というのは、よく言われることですけれども、必ずもとの言語の中での意味とは、ずれるものです。機械的なものでさえ、ずれてしまう。「ツナミ」などはゆれが少ないでしょうけれども、経済活動についての「スシ」あたりになってくると、随分違いますね。「てんぷら」という言葉がありますね。「てんぷら」は、最初は「エビのてんぷら」だけが、「てんぷら」であったのですが、向こうから日本語に入ってきたものも一番必要としている便宜的な言葉で当てはめて、私たちは使い始めます。ですから、もとの言葉を入れるという発想よりは、第1の段階ではそれを借りて、借用して、日本語の中で、ある事実、事柄をつかう、そうしていかないとかえって外来語そのものも、あるいは日本語を外国語に持っていくのにも、問題を起こすことがある。日本語が外へ出て行くのも結構多いです。英語の中に入っている外来語では、フランス語に次いで日本語が多いという調査があります。そこに、追いかけていって、「日本語の使い方間違っていますよ」と言うのはどうなんでしょうね。しかし、考えなければいけない課題だと思います。これは非常に面白い質問です。「最近の洋画の題名、英語そのままの長い題名が多いように思います。昔なら

適当ないい題になっていたと思いますが、こういうのは翻訳力、国語力の低下があるのでしょうか」。ある参加者の方からの提言です。私も多分そうだと思うんですが、むしろ皆さんがこういった洋画の題名みたいなものについて、ちょっと観察して下さって、昔とどう違ったか、今、長ったらしいのは、翻訳者が怠けているからそうなってるのか、あるいは見る人たちが、名前が長いのでないと納得しない時代になっているのかなあ、というようなことを、考える手がかりにしていただけたら楽しいだろうと思います。

「蓬来と蓬左についてもう少し詳しく説明してください」。これは時間があまりありませんので、ぜひ図書館に行って、それで名古屋の歴史、名古屋市史というのを、（どちらかというとも薄い小さな本で探すよりは、大きめのお厚い本で）、探してみてください、結構詳しく書いてあります。ぜひお勧めします。以上です。

**司会** ありがとうございます。それでは最後に、それぞれの会場からの御質問を受けまして、「外来語の役割とは何か」「外来語の未来とは」といった問題について、3人の先生方に意見交換をお願いしたいと思います。

**杉戸** 最後のまとめの時間だけ、半ば進行係に、半ば発言係として私が務めます。今日の表題で「外来語の過去・現在・未来」となっているうちの、過去と現在については、話がいろいろな方面で広がったと思います、あるいは深まったと思います。未来について、さてどうするか。また、未来はどうなりそうかという見通しはどうか、そういったところで、残された10分あまりだけですが、時間をとろうと思います。最初に私が意見を伺いながら強く思ったことは、坪内逍遙あたりの人たちから始まった外来語の使い方の努力が、書き手自身のためではなくて、読み手への気配りでほとんどすべて尽くされている、覆われているというふうに取りました。つまり、小説ですから、読者にウケなければいけません。読者に分かってもらわなければいけませんから、読み手への気配りから、外来語の使い方をいろいろ工夫する、あるいは読み仮名を付けたり、カタカナ言葉のあとに漢字の言葉を添えたり、いろんな工夫をしている。逆に言うと、書き手は努力するばかりで、書き手にとってのよいところ、メリットはどこにあるのか、つまり、言いたいことが表せるということは、メリットなんだろうが、そういうことはあまり感じられない。一言で言えば、読者へのサービス精神、読者への気配りが満ち満ちた世界だと思いました。このことと結び付けて将来に向けての、また心構えになってしましますが、小説家に限らず一般の我々の、言葉の暮らしの中で、話し手・書き手というもののよりも、聞き手・読み手への気配りを、もう一度この外来語をもとにして取り戻す、あるいは大切に思う心を見直す、そういったことができないかというふうに思いました。しゃれた感じが表せる、あるいは谷崎潤一郎、志賀直哉、三島由紀夫などのお金持ちの世界を表現するとか、豊かさ、あるいは知識を表現するというものが感じられるという

のも出ましたが、これもやはり読者への表現の意図だったと思います。清水さんもおっしゃいました、谷崎潤一郎本人が別に金持ちを誇りにしているわけではない。自分のことは考えず、読者を気にした知性であったと。そのことを小説だけではなく、我々のごく普通の、日常の言葉の暮らして思い出しながら、つまり聞き手は本当に分かってくれているのだろうか、聞き手にもっと分かってもらいやすい表現はないだろうか？ というような、そういうことを考えていくことが表現する者として、言葉そのものの問題としての解決策ではなくて恐縮ですが、言葉を使う者としての、将来に向けての一つの大切な部分ではないかと、そんなふうに思いました。私のほうの話に引き寄せすぎかもしれませんが、いかがでしょうか。

**清水** 確かにそうでした、小説家が小説を書くときに、文章でどういうことをねらっている、希望しているかということ、もちろん内容が伝わるということなんですけれども、伝わるだけでは物足りません。この人の話は聞く気がするなという感情を伝えたいんです。そこで外来語を使ったりするんです。つまり、そのところで外来語を使ってあるせいで、かえって今ふうに、取っ付きやすくこの人がしゃべっているんだと、そのことが伝わって、若い人は読みやすいし、読む気になってくれるだろうというふうに計算するんです。私は老人会のパンフレットに原稿を頼まれたら、それは書きませんよ。そこでは、この人はしっかりしゃべる人だという印象を与えたいから、そういう文章を書くわけです。ですから未来的にどうなっていくかということ、読み手の変化ですよ、やはりどうしても。読み手のほうが今の、例えばアニメ、ビデオ、ゲームをやって、テレビゲームをやって、携帯でメールをやってという小学生が、もう10年もすれば私の読者になってくるわけですから、そのときの彼らの用語を使って書きたいです。そういうふうにする外来語は変わっていくのであって、根本のねらいで、私とあなたは同じ言語感覚をもっている人間だから聞いてね、という精神構造は、未来も一緒なのではないかと思います。

**杉戸** 最後のほうに魚が出ました。「ギンダラ」とか「ピラニア」とか。これを漢語、あるいは和語で言うと、また別の購買意欲をそそるとかですね、そんな話が出ました。今この話もやはり関連すると思うのですが、どうでしょうか。

**水谷** 言葉の送り手と受け止め手という関係の中で、圧倒的に送り手が強いという場合と、受けとめ手が参加できる場合とあると思うんです。現実の使われ方を見ていると、結構うまくいっていると思うんですが、時々、これどうしてかなというのがあります。物についてと言いましょか、本来、日本語で表しうるものであっても、カタカナ言葉で売れるだろうとか、お客が来るだろう、あるいは評判がよくなるだろう、という意識の下に使う場合があるようです。気になってしょうがないのは、「ガーデンパレス」というホテル、宿泊施設がありますが、共済組合のどうのこうのというのは、確かにイメージ

が古いかもしれません。でも「ガーデンパレス」でなくたって、他のものがあつたのではないか、「南セントレア市」というのが一時期問題になりましたけれども、そういう方向で、社会状況としては、カタカナをどんどん入れる方向に向いてきている。カタカナだけではなく、ローマ字も、会社名に使っていいという法律が本年度からでしょうか、できたわけですね。そういうふうにして動いている中で、我々がもともと、もっているものを乗り越えて、客を呼ぶためにという読みで、名前を付けたときに、東京の虎ノ門に昔、「農林会館」があつたんですが、今は「虎ノ門パストラル」と言うんですけども、この「虎ノ門パストラル」、いまだに全然分かりません、覚えられない。その言葉の受け止め手がどう苦勞しようが、客が、より来る可能性があるのがいいというような考えがあるとすれば、やはり不真面目ではないか、人を大事にしようというのがまずあって、その中で言葉の選択を考える、という、やはり送り手だけではなくて、受け止め手のことを考えないと、せっかくもっているものを壊してしまう可能性が高いだろうと思います。ちょっと答えがずれました。

**杉戸** ずれていません。つながっていると思いました。本当に時間がなくなってきたのですが、最後、司会に返す前に、一言ずつお願いしたいのですが。ぶしつけながら最初に言わせていただきます。今の話に関連していることです。聞き手とあるいは読み手ですね、受ける側と、書き手・話し手、送る側、その二つの中で、特に聞き手・読み手、受ける側への気配りが大切だ、あるいは小説家たちはそれを気にしていると。そういうことをきっかけに話を始めていただきましたが、じゃあ書き手・話し手のほうはどうすべきか、ちょっとこれ、一方的になります。誤解を恐れずに言えば、書き手・読み手は、当分我慢しなければならないと私は思います。これはどういう我慢かと言いますと、私の最初の話の最後で申しました、一歩立ち止まる、ということですね。本当に相手に伝わる言葉になっているのだろうか、自分の言葉を絶えず見直すような努力が必要だと。我慢すること、つまり外来語を使えばカッコいい表現ができるとか、新しさが表現できる、これはおそらく、そういう場合が多いでしょう。しかしほんとにそれでいいのかというところで、立ち止まる努力が必要、それを続けたいいけないだろうと。それは何のためか、読み手のあるいは聞き手のためだと、繰り返し申し上げたいと思います。書き手・話し手、送る側はやはり一歩立ち止まる我慢をする。そして逆に聞き手・読み手のほうは、我慢しないで、「分からない!!」と言うことで相手に反応を返す。そういうところで、言葉のやりとりで、外来語のもつ〈陰〉の部分が減ってくるだろうと、具体的な1回1回の場合で減ってくるだろうと思います。我慢するとかしないとか、本当に気持ちの問題を申し上げていますが、これは最初にも申したように、その都度その都度、ちょっと思い起こすと、割に効果のあることだと私は信じます。手紙・はがきを書いてい



でも、どちらの言葉を使おうか、これも一種の我慢から始まると思います。そういったところを自分も含めて、あるいは自分をはじめとして努めたいと思って、外来語から広がる言葉一般の注意事項だとは思いますが、そのように考えました。すいません、ちょっと長くなりました。

**清水** 今の杉戸さんと共通する話になると思うんですが、私、今、週刊誌でビジネス文書の書き方の講座を連載しています。昨日、書いて入れた原稿が、外来語をどうするか、ビジネスマンがビジネス文書を書くとき、外来語をどうするかということに関してでした。私の結論は、もう書くしかないでしょう、いちいち和語にしようとするのが難しいですよ。それから、日本人は外来語を非常にしばしば略語にして使っています、それも、それでいいです。「パソコン」を「パーソナルコンピューター」、「ワープロ」は「ワードプロセッサ」というふうに企画書の中でそうしなければならないってことはない、略語でよろしい。ただし、使ってはいけない略し方というのを最後に書きました。学生が知ったかぶりをしたり、テレビ業界の関係者などが俺たち業界人だもんねと気取る、というときの略し方ってあるんです。「アポ」とかね。「アポ」は「アポイントメント」と書きなさい、「キャパ」なんて書くんじゃない、「キャパシティ」と書きなさい。そういうふうに、学生の仲間の自慢とか、業界人の自負みたいなものの略語を使ってはいけません。そうではなく、「パソコン」とか「ワープロ」とかはいいんです、という結論にしたんですね。それも、どこまで相手と距離をとるか、分かってもらえるかのその我慢の部分じゃないかと思います。

**水谷** あの、自分の言葉、あるいは身の回りの言葉というのを、意識的に捉えるというのはすごく難しいことだとは思いますが、やはりそこから出発しないと、事は解決してこない。社会のどンドン外から物が入ってくる。今は、カタカナ言葉レベルで話をしていましたが、ローマ字がどのくらい入ってくるかというのが大問題で、すでに今、ローマ字だけで、お店の看板でも、「閉店」とか何とかじゃなく、「セール」「バーゲン」とか書いてあったのが、英語で、"sale"になってきている。そういう状況があると、もし仮に新聞が縦書きから横書きに転換するような事態が起こればですね、それに流されてしまって、非常に表層的な言葉の使用に移りかねない。どこまで踏ん張って、自分自身の言葉と相手に伝えるために何が適切かというのを考えるような、そういう習慣、このためには余裕が絶対必要だと思うんです。それをできるようにするための教育やキャンペーン活動がこれからすごく大事になるだろうと思っています。

**杉戸** ありがとうございます。これで時間となりましたので、私どもの壇上での話し合いはやめさせていただきますが、最後に一言だけ、進行係を務めたものとして、外来語そのものがどうなっていくのか、という御質問がありました。それについて私ども、最

初の私の切り出しで、その言葉を使う人間の心構えというところから入りました。このことは、言葉そのものがあって、それを使う人がいるという、その仕組みを意識してのことです。そしてさらに言うと、言葉が言葉だけでふらふら変化したり動いたりはない。必ず使う人、書く人、話す人、そして受け手、聞く人、読む人がいて、言葉がその人たちの間を行き来するという、人の問題だ、というふうに訴えたかった。そういう進行係としての思いがありました。ありがとうございました。では司会者のほうに変わります。

**司会** まだまだ続けたいところですが、残念ながら時間となりましたので、これでお開きにしたいと思います。皆さま、再度大きな拍手でしめたいと思います。御清聴ありがとうございました。それでは、最後に、アンケートのお願いを申し上げます。同封いたしましたピンク色のアンケート用紙、お手数ですが、ぜひ感想などを御記入くださり、係の者にお渡しください。筆記用具は、会場を出たところにも御用意してありますので、御協力よろしくお願ひ申し上げます。

<終了>